

Title	聖徳大学所蔵『七夕』(下巻)翻刻
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	三田國文 No.53 (2011. 6) ,p.19- 46
JaLC DOI	10.14991/002.20110600-0019
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20110600-0019">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20110600-0019</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 聖徳大学所蔵『七夕』(下巻) 翻刻

辻 英子

本稿は、『三田国文』第五十二号所収「七夕」(上)翻刻」を承けるものである。末尾に上・下巻の挿絵全十三図を載せる。なお聖徳大学所蔵の絵巻類は一般には公開されていないので、本稿をご参照いただければ幸いである。

今回は、二〇一〇年九月十四日に調査を行った類話の一つである「天稚彦草紙絵巻」(ベルリン国立アジア美術館所蔵)の写真に掲載する。本絵巻は、室町時代(一五世紀)成立の優品の未整理品の中から再発見されて以来同氏をはじめ、おおくの物語絵研究者による先行研究がある。近年、『美がむすぶ絆ベルリン国立アジア美術館所蔵日本美術名品展』(郡山市立美術館・岩手県立美術館・山口県立美術館・愛媛県立美術館編)「ホワイトインターナショナル 二〇〇八年三六〜三九頁」に全容が紹介されているが、一般に入手しにくいカタログであることから、同館日本美術部長アレクサンダー・ホフマン氏 (Dr. Alexander Hofmann) の厚意によりここに掲載する(掲載許可取得二〇一〇年九月三〇日)。

二〇一〇年七月、徳田和夫氏による「天稚彦草子」(別冊太

陽 妖怪絵巻 日本の異界をのぞく」平凡社 三八〜四三頁)に、四図の美しい挿絵が紹介されている。次いで高岸 輝氏による「海外所蔵の室町土佐派絵巻について」(説話文学会 二〇一〇年九月例会 海外所蔵の絵巻・絵入本)二〇一〇年十月二日 於・学習院女子大学)のなかで、同氏が二〇〇九年八月に行った同「天稚彦草紙絵巻」調査の報告がなされた。書誌および参考文献等については、当日配布されたレジユメに詳しく、次のように記す。

奥記に「詞 當今宸筆／繪 土佐弾正藤原廣周筆」とある。奥書は書風から伏見宮貞成親王(後崇光院、一三七二〜一四五六)の筆、当今は貞成の子である後花園天皇(一四一九〜七〇)と考えられる。

聖徳大学所蔵『七夕』詞書

(下)

さるあひた姫君はをしへのことく風にま

かせて行たまふに爰そ風天のさかひと  
おほしくて大空の雲たえて風のは  
けしき事みつはのそやをいることく  
なりこゝにいたりていかゝせんと四方をみ  
まはしたまへはとうかいのなみまん  
くとしてさらにほとりもなく水のそ  
こにはとくしやあくきよろこをたて  
くちよりくわゑんをはきまなこのひかり  
日月のことくそのときひめ君こゝろの  
うちにきねんしたまふはなむや日のも  
との大小のしんきこのたひふうふしう  
しやくにをかされてほんふの身として  
天上にあこかれし事しやあんの御と(第1紙)  
かめのかれかたしといへとも一たひちゝ母  
のために身ををしますすてたりし  
こゝさしいかてか見すて給ふへきと  
たなこゝろをあはせこくうをおかみた  
まへはいつくともなくにしのことくなる  
五色のひかり一すちさしければへうく  
たるなみさうにわかれてみち見えたり  
これそあやまたぬ神のちかひとよろこ  
ひたまひてかのひかりにのるとおもへは  
いとをもつてひくかことくへんしのほ  
とに水天しんやのことくになるところを  
すき給へは又一つのせかいあり日月常

のことくにあきらかなりこれそたう  
りてんとおほしくてもろくの佛は雲  
にせうしてくわんけんをしらへありかたし  
ともいふはかりなしこゝにて天人一人  
ゆきあふたりあめわかみこの御ありかは  
いつくそとたつね給ふに今すこしゆ  
き給へはろくちにつゝきたる所こそみ  
このきんちうなりとそをしへけるうれし  
くおほしめしいそきたまへはけに  
も金銀のいさこをしきくうてんの  
みきりにはくせいふのふねをうかへかれう  
ひんはつはさをならへほうわうは竹の  
はやしにまひあそひ四きさうせつは  
一時にあらはしこかねのいらかの野へに  
は梅のにほひかうはしくかさね桜に  
をそさくらかたへちりてさきみたれ  
南の庭の木ゝのはへしけりたる卯  
の花かき山ほとゝきすこゑそへたり  
にしぬまにはたいゑぎのふようの  
(マミ) (マミ)の器守カ  
あたかに水をはなれくわりきくしたん  
の秋の野はむしのこゑくほのめき  
けりいつしかもみちは色をそへにしき  
の山のことくなり北のたかねには雪白  
たえにかせさむしはなふりをんか  
くこくうに聞えければこくらくせかい

(第2紙)

をまのまへにおかみけるこそありかた  
けれおほくのくわいろうを行すきて  
も恋しき君はいづくにかまします

と宮のうちをさしのそき給へはあ (第3紙)

めわかみこそおはしけりうれしき  
こゝろもきゆるはかりなりするゝと

はしりいりいかにみつからこそこれまて

あくかれ参りたりつれなくもすて

させたまふ物かなといひもはてす御

ひさのもとにふししつみ給へはみこもう

れしけにてさてもこれまてたつね

給はんとはおもひもよらざりきとて

なをしの袖をぬらしたまふしはらく

ありてひめ君なみたをおさへてみつか

らいやしき身のいかなるしゆくえん

にや露はかりのちきりをこめ給ひ

夢のやうにまたも 見えたまは

さる事の

うらみても

あまり

あり (第4紙)

〔絵一〕 (第5紙)

されは前世のかいきやうつたなきゆへに  
下界の人間とうまれけるこそかなし

けれとかきくとき聞ゆれはみこもあ

はれなること葉にこゝろみたれされは

とよ我てんにもすめは天上のならひ

としてかりにも人間にまみゆる事

かたしされともゆうなるなさけにひ

かれてあまくたるといへともつゐに

そひはつへき身ならねはこゝろな

らすもうちすてぬといつはりなく

のたまへはひめ君ことはのありかた

さにこの程のうきおもひもわするゝ

こゝちしてゑんわうのふすまの下に

まくらをならへ給ふさるほとにかゝる

めてたき天上にも五すい三ねつ

のくるしみとてうき事こそいてき

たれしゆみのはんふくをりやうするそ

くさんわうとてきしんありもとより

しんつうしさいの身なれば此事を (第6紙)

聞あめわかみこのまへにきたつてま

なをいらてゝいひけるはいかなれば

下界の人間をこれにはとゝめ給ふそ

てんしやうと申は佛の国にて待れば

ほんふの身をかへすしてきたるこ

とかいひやくよりこのかたそのためし

なしいそきをつくたしたまへとい  
かりければみこのたまはくなんちまゑ

むの身として我まへにせひなくいた  
らん事天のおそれはいかゝせんとて  
あふきをもつてうちたまへは御まへ  
をたちつるにはをつかへし申へしと  
てかきけすやうにうせにけり

ひめきみ

あまりの

おそろし

さに

色をかへ

てそ

すみ

たまふ (第7紙)

〔絵二〕 (第8紙)

それく此あめわかみこと申たて  
まつるはひるはたうり天にまします  
といへともよるはにんかいをてらした  
まふみやうれんしやうといふほしにてお  
はしければ暮ぬれは一天さかり給ふ  
姫君をはありし所にのこしをきて  
出たまふときにかのきしんひまをう  
かゝひ来てひめ君をさいなむ事こ  
そおそろしけれなんちしうしやくふか  
くこのところにきたる事天上の  
けかるゝこそきくわいなれないさゝせ

給へとていたはしくもひめ君の御手  
をひつたてしゆみせんにとひ行ける  
ひめ君はこはそも命をうしなはるゝ  
よとおほしけるにさはなくて鬼神  
のいふやうはわれこのほとしもつかへ  
なくして千疋のうしともものうへに  
のそみしなりこの牛を野辺につ

(第9紙)

れて行草をかふへしきなくはいの  
ちをうしなはんとせめければちからをよ  
はず牛屋のまへにてなきしつみ  
たまふなにとしてならはぬわさを  
すへしせめて五疋三疋ならはいかに  
もつれていつへきに千疋の牛の  
我まゝにはなるへきとひとりことして  
かなしみたまふまことやきく事有  
あめわかみことたにとなふれは萬の  
ことのしやうけをまぬかるゝときこゆ  
物をとてうしやのまへにてあめわ  
かみこあめわかみこととなへたまへは  
千疋のうしとも野辺に出てもふ  
まゝに草をはみて又もとのうし屋に  
たちかへりけり (第10紙)

〔絵三〕 (第11紙)

きしんこれを見てあらふしきや人間  
とはいひなからたゝ人にはあらしとおと

ろきけるかやうくしのゝめのそら  
もあけかたになりければみこのかへら  
せ給ふおりなれは御とかめもおそろし  
とひめ君をかきいたきもとの所にお  
くりけりみこかへらせ給ひていかにつ  
れくになんおほしけるとたつね給  
へはものをものたまはすうちしほれ  
たるありさまなりやゝありてうき  
めにあひしことゝもかたりたまへはみ  
こはさらにをとろきたまはずけに  
さもあらむ御身ふしやうなる身  
なれはあくまのしやうけのかれ給はし  
今一七日すきはしやうくの身となりて  
天人の位にいたり給ふへし又暮なは  
きしんきたるへしその時この袖をも  
ちてうきことのあらんおりふしはあ  
めわかみこといひつゝ三とふり給へとよ  
たとひ千万のきしんきたつてせむ (第12紙)  
るとも身のくるしひはのかるへしと  
をしへ給て日もやうく暮かたに  
なりねれは又たゝひとりきて出  
たまふしこくうつきす鬼きたつて  
ひめ君をちうにつかんとりのとふ  
かことくしゆみせんのみかにつれて  
ゆきあるくらのうちに千石の米あり

へんしのほとにこなたのくらへはこ  
ふへしさなくは命をうしなほんとい  
かりければかなはしとおほしけれ共  
をしへのことく袖をとりいたして三と  
ふり給へはいつくともなく大きなあ  
りわき出てかのくらの米をくはへて  
一時のうちにはこひけりきしんはくらの  
まへにてさんきをもちてんけんし  
けるかいかゝはしたりけん米一りゆうたら  
すとてひめ君をせめければあまりの  
かなしきにたちあかりあたりをたつ  
ねみたまふにけにもてあしのそんし  
たるあり米一りゆうくわへてよろほい  
けりこれかやさんようのふそくはとの  
たまへはおにも (第13紙)

さすかたうりに  
せめられて

あきればて

たる

ありさま

なり (第14紙)

〔絵四〕 (第15紙)

かくてまたあけかたに成ければひめ  
君をいたきもとの所にきてかへり  
けりみこかへらせたまひてこよひはい

かにととひたまへはされはなんきのお  
もひをなすといへとも御をしへにしたか

ひて御そてをふりければさらにしきひなし

とかたりたまふみこ聞しめし今ふた

よ三夜のその間いかなる事の侍ると

も身をいたみたまふなといさめを

きてまたくれければみこ出給ふとひ

としくしんきたりていさなひ

ゆきうちたゝきさいなむといへとも

身をくるしみたまふけしきもなし

鬼このありさまを見てなんちは女

なれともつれなきつらたましゐや

をそれむほとせめんとて四方をと

ちたるくらをひらきければたけ三

尺はかりなるむかて千万くらよりは

ひ出たりいたはしけもなく姫君をと

つて蔵のうちへなけ入てをのれはくら

のまへにはんをしてこそゐたりける

むかて久しくくらにこめをきた

る事なれば人かのかうはしきをよろ

こひて姫君の御手あしにとりつき

けるをか袖をもつて三とはらひ給へ

はをそれてさらにはたらかすむかて

のあしうをのおにあかれることくにて

いきつきかねたるありさまなりさしも

(第16紙)

しんつうしさいの鬼といへともせむへき

しゆつぼうつきはてゝいかゝしてかな

やまさんとあんしけるに空も又あけ

なんとしければみこのかへらせ給はんを

おそれて又ちうにつかんでひつきけ

宮の中になけいれて我身はしやは

へそかへりける姫君はかのたもとをも

つてよろつをのかれたまふといへ

ともあらけなき鬼神につかまれて

心もよはりはてよしゝこれとても

人のなすならすされは佛のときた

まふしうしやくのまうねんつもりてすな

はちあつきとなりその身をかいすと (第17紙)

いへりさらになけくへきみちにあらす

とみつからさとりをひらき君をおそし

とまちたまへはみこかへらせたまひ

てすきし夜はいかなるくるしみをか

うけたまふらんとなつかしけにてかた

らひ給へはつみもむくひもわすれて

さてもいつかはこのなんをのかれ一夜

のむつこともあらまほしさよとなき

くときたまふに又日も暮ぬればみ

こよるのつとめに出たまふ其夜はす

てに七日にまんする夜なれば鬼神

もろゝのあくまけたうをかたらひ

くわしやをひきらいてんいかつちなり  
わたつて天地うちかへすことくに時の  
こゑをつくり御てんちかくかみなり  
ひゝきわたつて雲のうちより大をん  
あけてとくくひつたてゝそのくわしや  
にとつてのせしゆみのいたゝきにのほ  
れとけちを

なす (第18紙)

〔繪五〕 (第19紙)

其時袖をとり出しあめわかみこの袖  
ととなへ三とふりたまへはきしんにか  
たらはれしけたうともあらいまく  
しみこのとかめたまひなはわれく  
までもかんにん成かたしとてすゝむ  
ものもなかりけるされともかの鬼は  
こつせんとしていかにたのみかひなき  
ものともかなひころきはをときほ  
こてつちやうをひつさけてはうはい  
ともときらめきしたるかたくの  
その身をみちんにくたかるゝとも一た  
ひたのまるゝほと心の心にてさやうに  
おくひやうにみゆるかきたなしせめい  
れといひけれとも更にみゝにも聞  
いれすしゆみのかたはらににけさりぬ  
よしくかたくかたのまれすとも

此女一人はからはんになにのをそれか  
あるへきといふまゝにこかいなを取  
てひつたてたりされともひめ君  
ことゝもしたまはず又ある蔵をあ (第20紙)  
けゝれはたけ一丈はかりなるくちな  
はを数千疋こめをきたり此くらへ  
をしいれんとてゆきけるになをし  
の袖をひそかにとり出し給へはくち  
なはともこれを見てかうへをさけ

夏の日にあへるみゝすのことく鬼この  
よしを見るよりもこれもかなはし  
とやおもひけんかなたこなたひつたて  
まはるほとに又ほのくとあけに  
けりその時鬼神いかりをやめいかに  
ひめ君いまはこれまでなりさんけ  
につみをゆるしたまへ我せんしやうは  
人わうのはしめにおうしうにすみし  
ものなりむまれなから色くろくた  
けたかくさなからきしんのことく也  
とてちかつく人もなしましてことは  
をかはず事もなく一しやうさいあひ  
のみちをしらすとし百年にをよひ  
てつゐにむなしくなるされは一しや  
うふほんのかいりきにて今天上にむ  
まれ佛の国にはすみけれともあくしん

(第21紙)



はくちせすきしんのすかたと成けり  
しかるに御身ちきりふかくまします  
事我身のむかしをおもふにしつと  
たえかたくして此七日かあひたあくき  
やうふたうのはたらきをなすといへ共  
これよこしまのみちなれば御身をい  
たみ給はずこのほととせめにより  
もろくのあくこうほんなふみなこと  
ことくせうめつして御身もけふより  
天人と成給ふそやこのきやくえんにひ  
かれてあつきこゝろをひるかへしわ  
れもしゆこしんとならんとかうへを  
地につけてかいふしけるこそふしき  
なれかゝるところにみこおはしまして  
いつまで夜なくかよふへきいさゝらは  
ふしやうふめつの佛となりみらいやうく  
にいたるまでくちせぬちきりをむす  
はんとてひめ君もきしんも引くし  
てほしのてんにくたりたまふみこ  
のたまふ人かいなるへき身の一所に  
あらんことこそよしなれたる月を  
へたてゝ七日くにあひたてまつらん  
とちきりてにしひかしに別れ給ふ  
姫君きこしめしあななさけなき  
おほせかな此ほとひめもすにちきり

(第22紙)

ふかくましくて一夜たにあかしかね  
つる我中を一年に一とあはんとのた  
まふはいかにとてなき給へはおもひの  
涙雨となり恋の中川身もうくは  
かりに水出てをのつから川をへたてゝ  
おはしけるいまのあまの川これ也  
きしんもしゆつせのほんくわをとけ  
まもりの佛となりにけり

いまの世のほこほしと申は

あめわかみこ

おたなはた

これなり

ひめ君はをりひめ

とてめ七夕と

申なり (第23紙)

〔繪六〕 (第24紙)

扱こそ御身のうへにおもひあはせしゆ  
しやうのちきりをまもり給ふとそそ  
もくあめわかみこと申は本地せい  
しほさつなり姫君はによりんくわん  
をんのかりに人間とあらはれかゝるふし  
きのありさまをしらしめんため  
御はうへんなりきしんとはあいせんみ  
やうわうの身をわけておにのすかた  
になりたまふなりいかなれば月の

七日にあひ給ふへきとありしを  
年に一とゞきゝあやまりたまふこ  
とふしきなりといふにそれ人けん  
のならひあまりむつまじき中はつ  
みにわかれのもとひともさのみうちと  
けたらんはりへつのはしめなるへし  
たゝこゝろにをこたらすなかきちきり

を人けんにしめし給はんため（ママ「か」共「説也」）の御  
かひありかたかりし事共なりさる  
ほとに長者ふうふはひめ君をいつく  
ともなくうしなひていたらぬくまも  
なくたつねたまふかそのありかを  
もとめえずつねは佛神のまへにま  
いりて今一たひあはせてたひ給へ  
といのりたまふかある夜の夢にこ  
のことつゝのことくに見え給ふさて  
こそあんとのおもひをなしたまふ  
されはおもはさるにみかとより官  
位をたまはり天下のまつりこと  
をとりをこなひたまふに国もゆ  
たかにたみさかへければ

天にかなへる

ちうしん

なりとて

大政大臣に

のほり給ふ

三かいひろしと

いへとも

我てうはしんこく

なれはかゝるふしきも

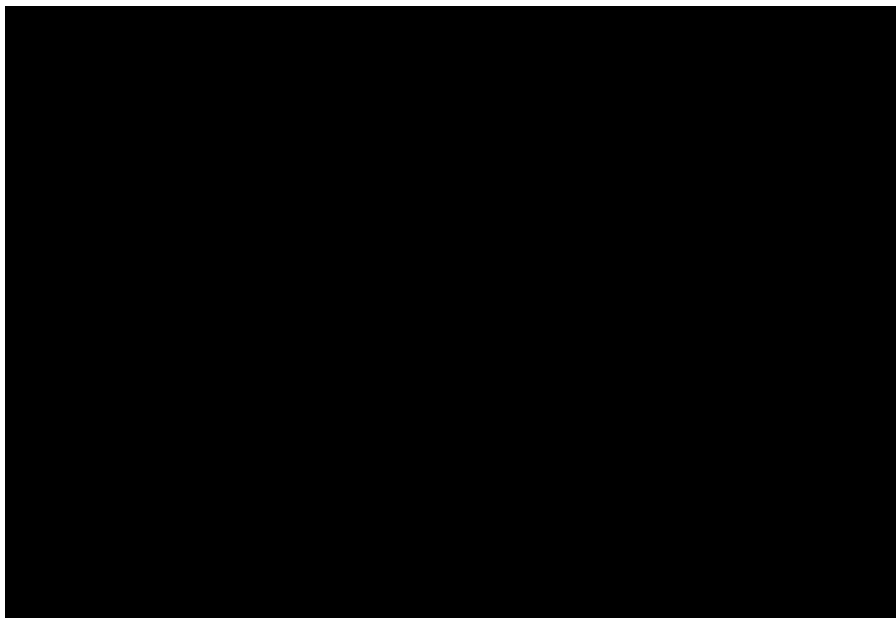
おほかり

けり

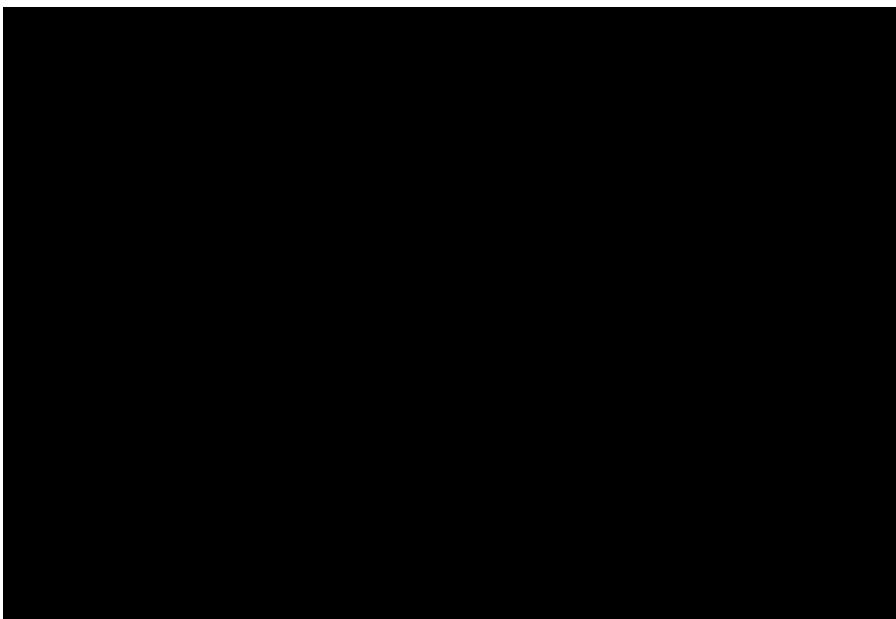
とそ（第26紙）

（付記）

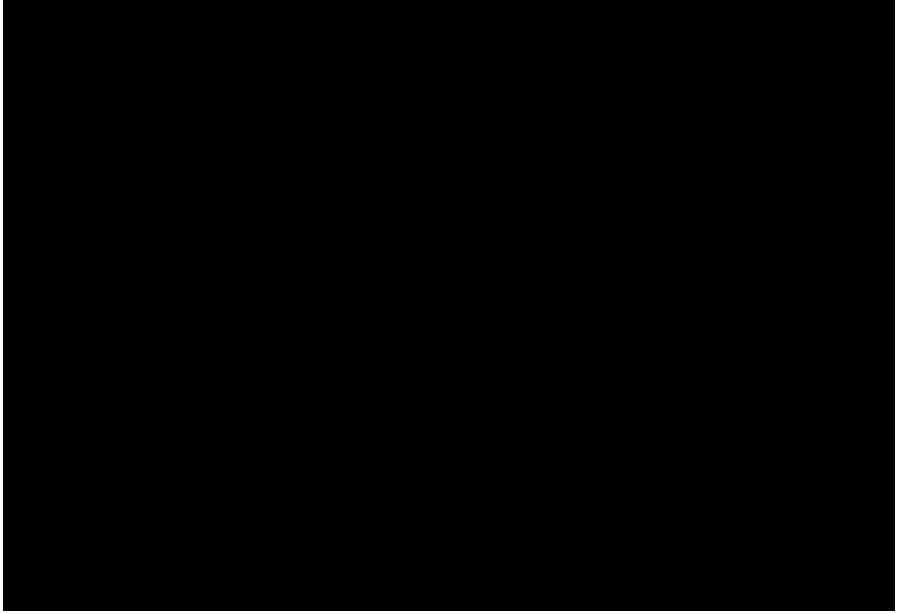
本稿は平成22～24年度科学研究費補助金（課題番号252192）  
による研究成果の一部である。



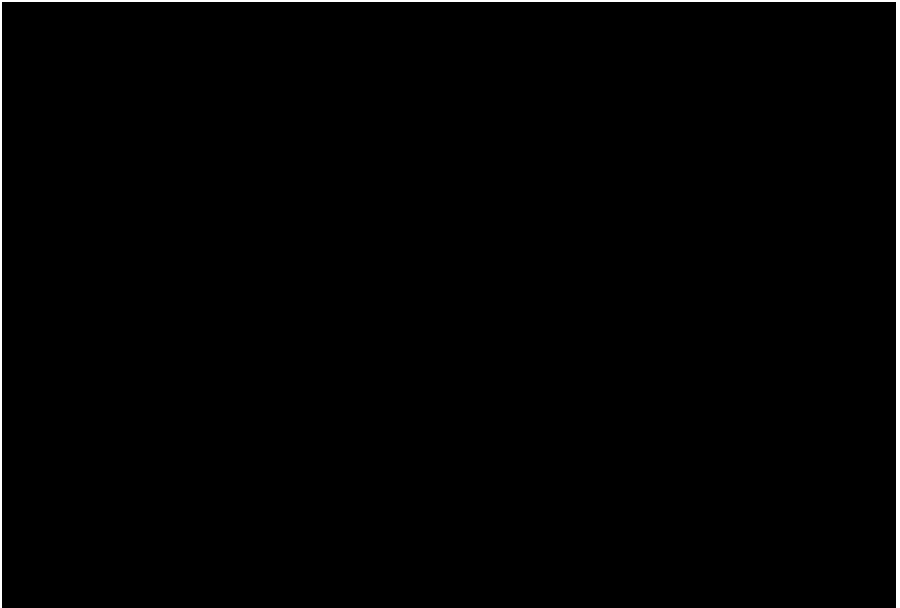
(上絵一)



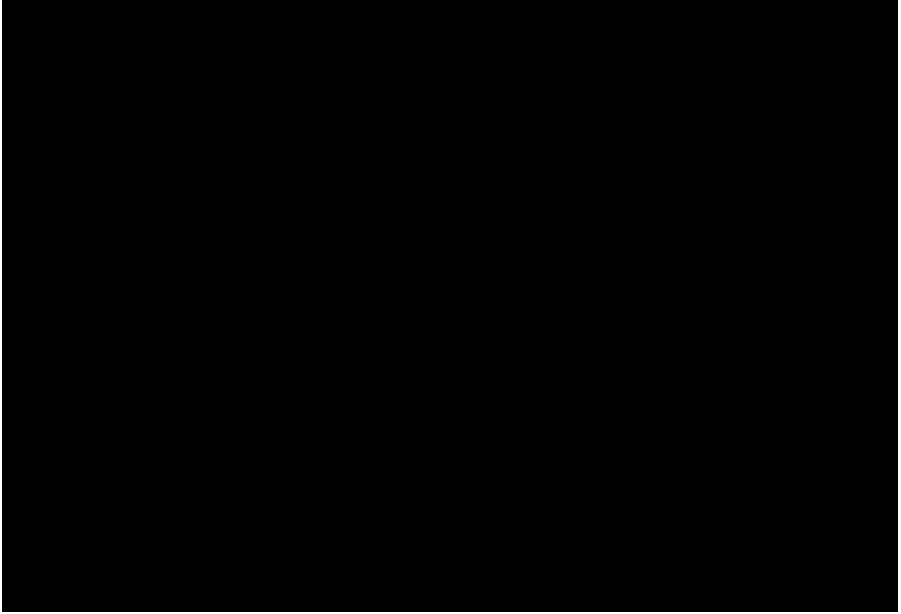
(上絵二)



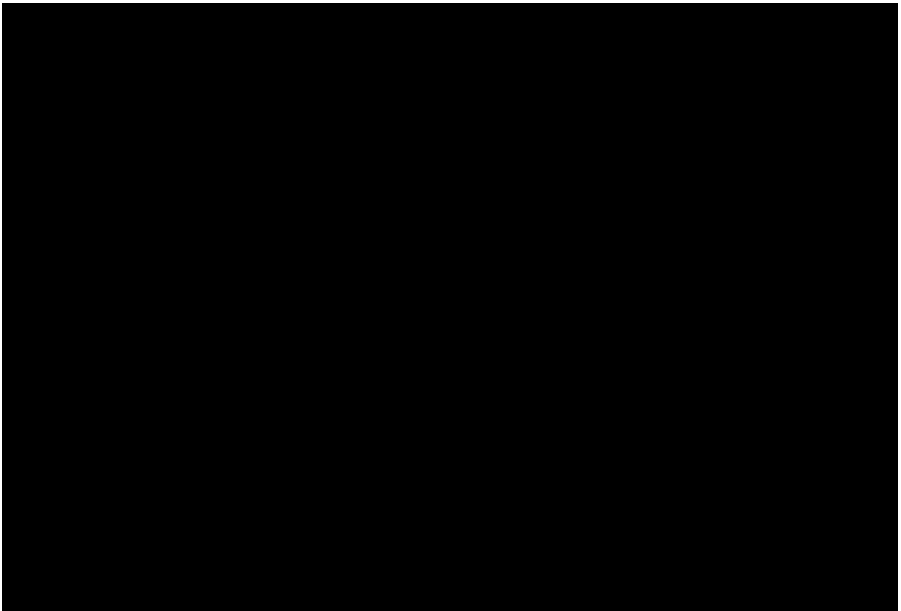
(上絵三)



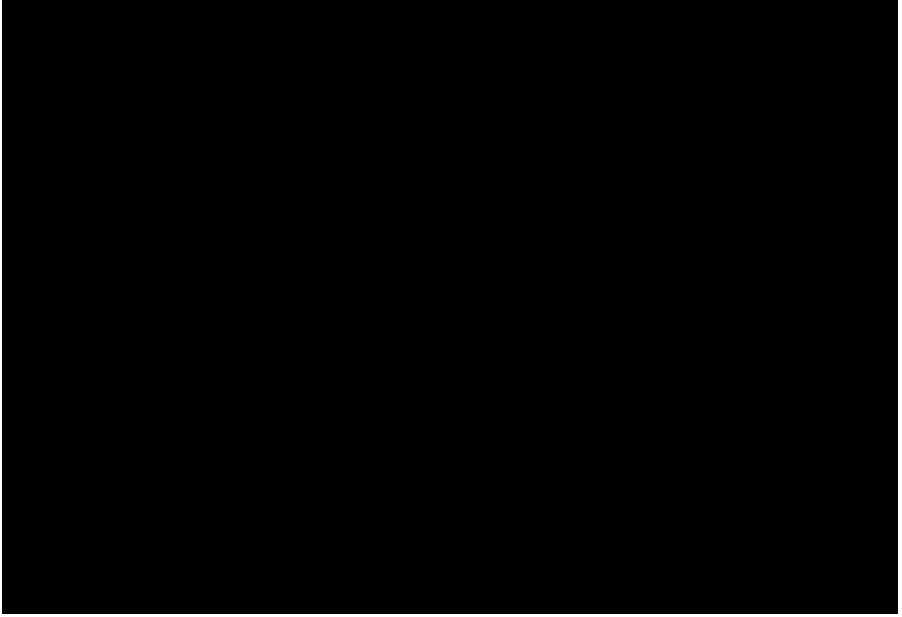
(上絵四-①)



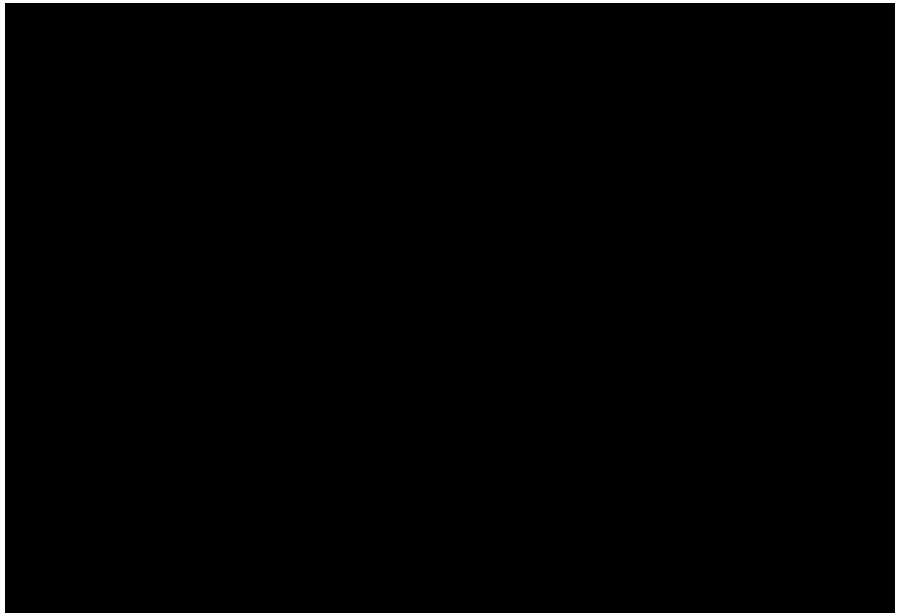
(上絵四-②)



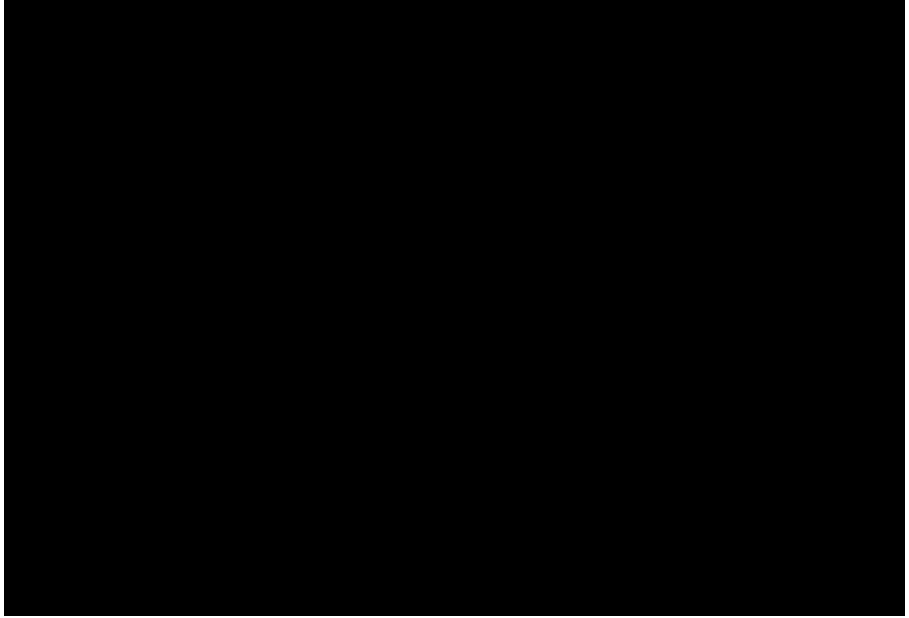
(上絵四-③)



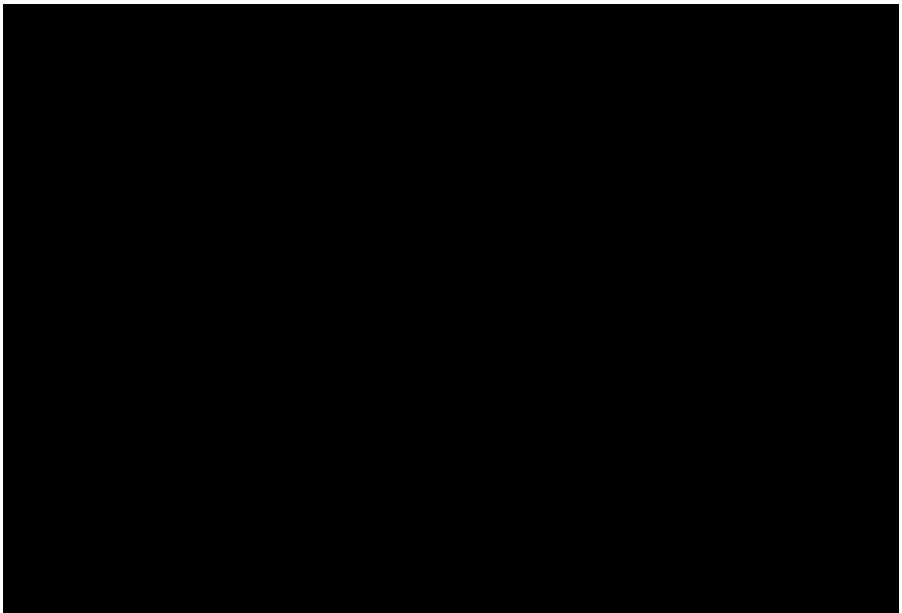
(上絵五)



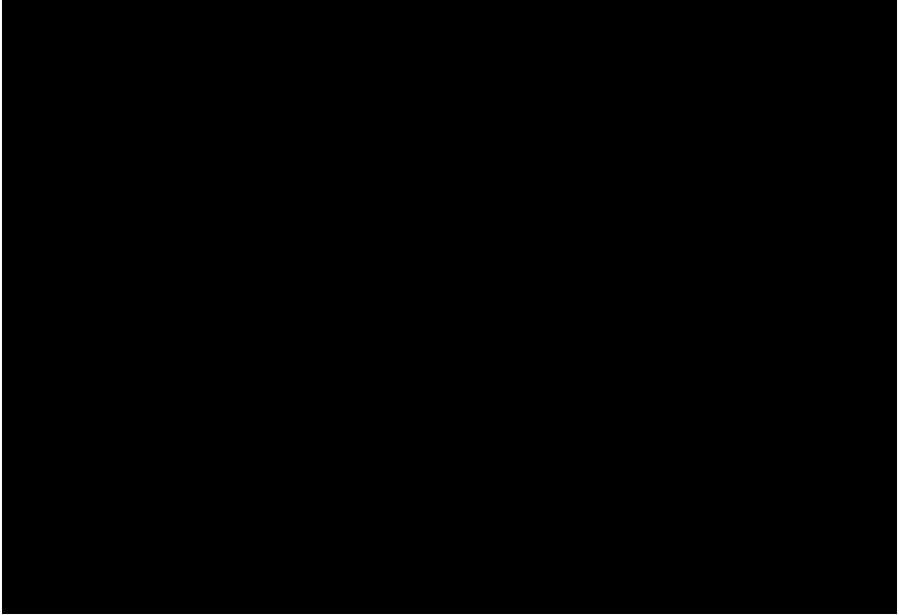
(上絵六)



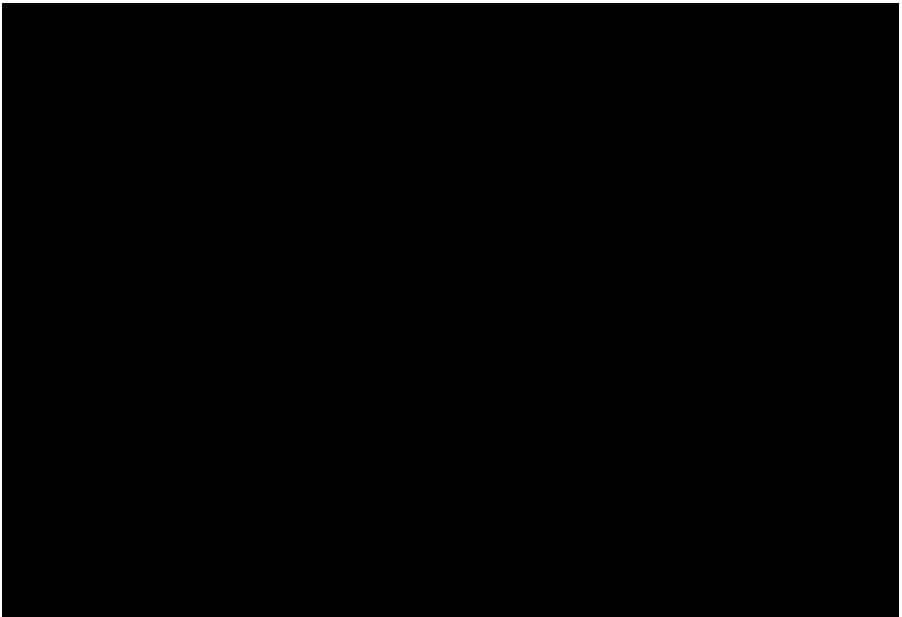
(上絵七)



(下絵一①)

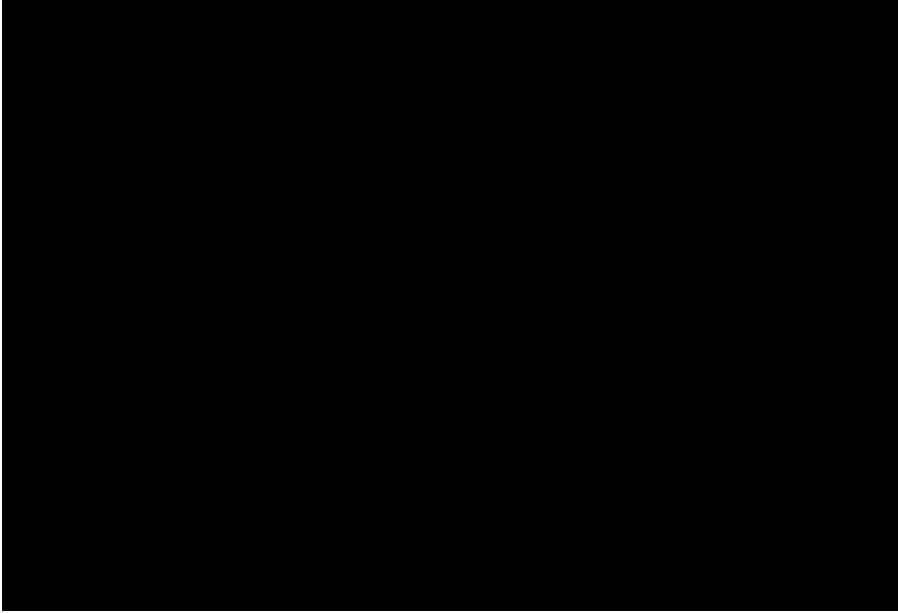


(下絵一-②)

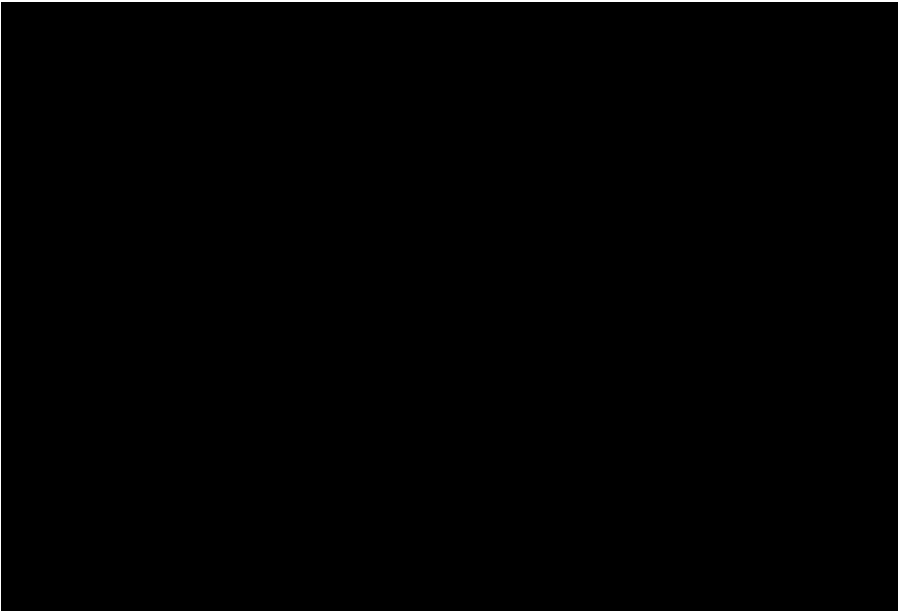


(下絵一-③)





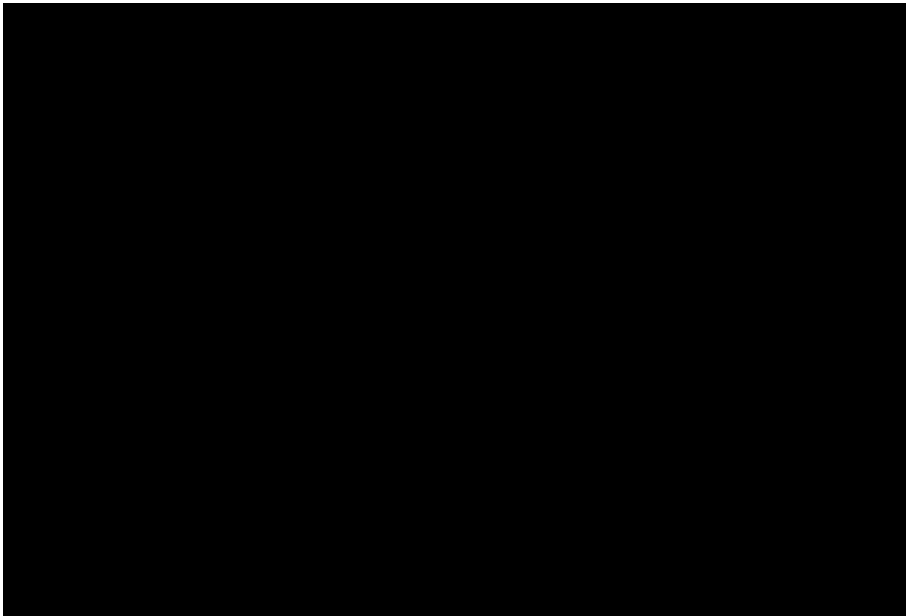
(下絵二)



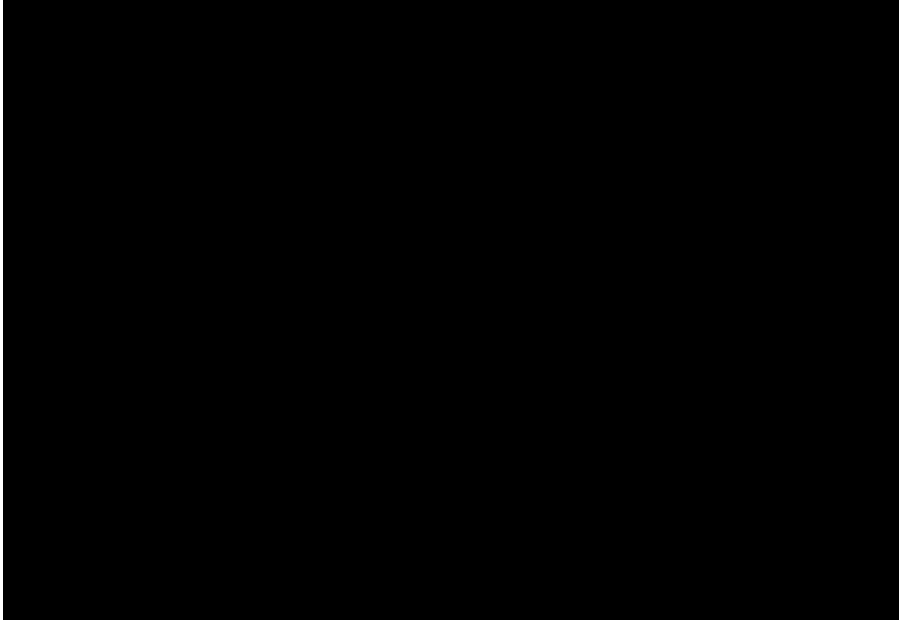
(下絵三)



(下絵四)

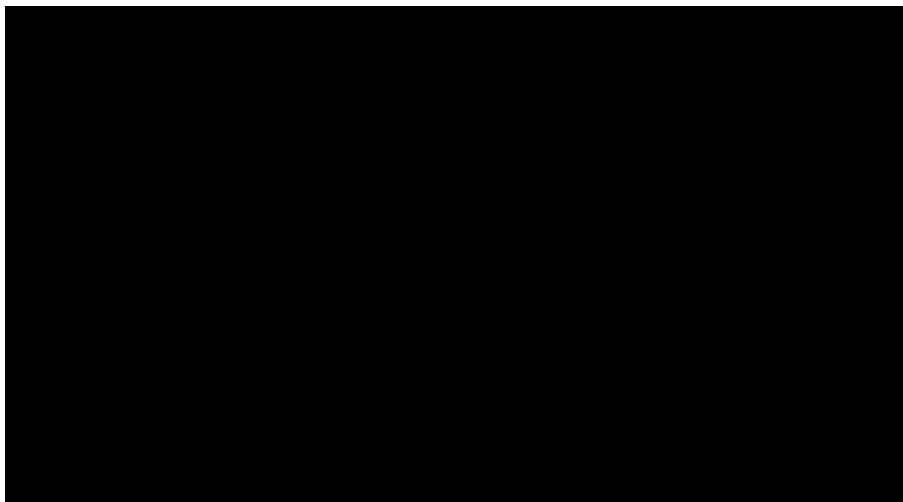


(下絵五)

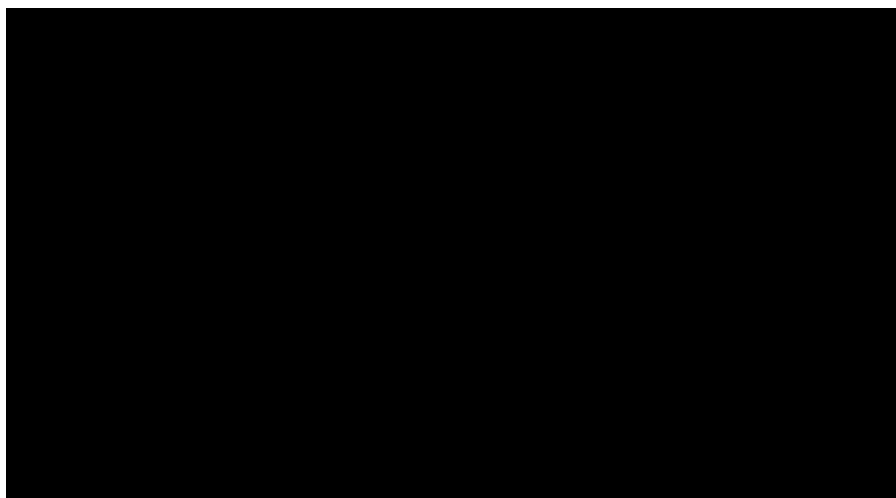


(下絵六)

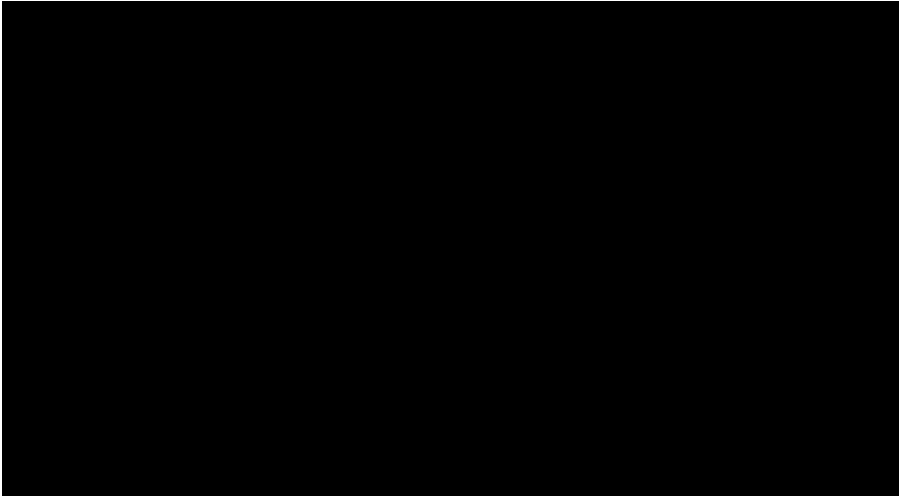
「天稚彦草紙絵巻」(ベルリン国立アジア美術館所蔵)



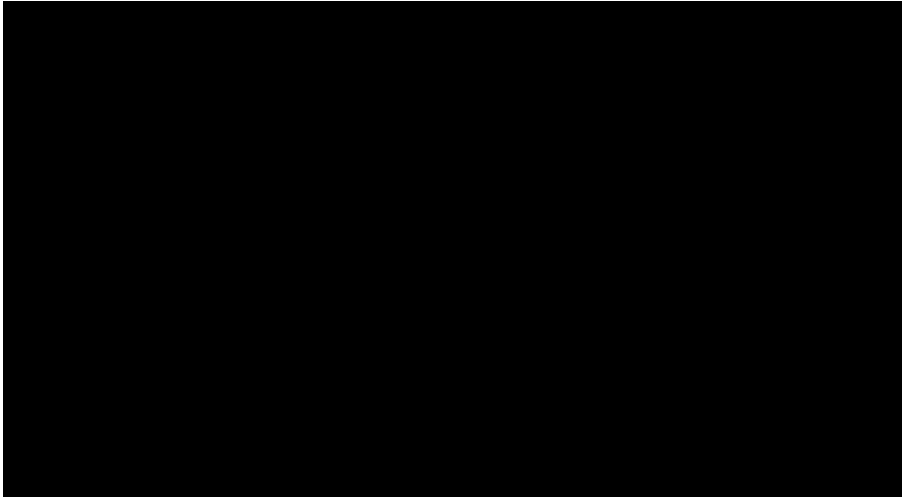
(第一段)

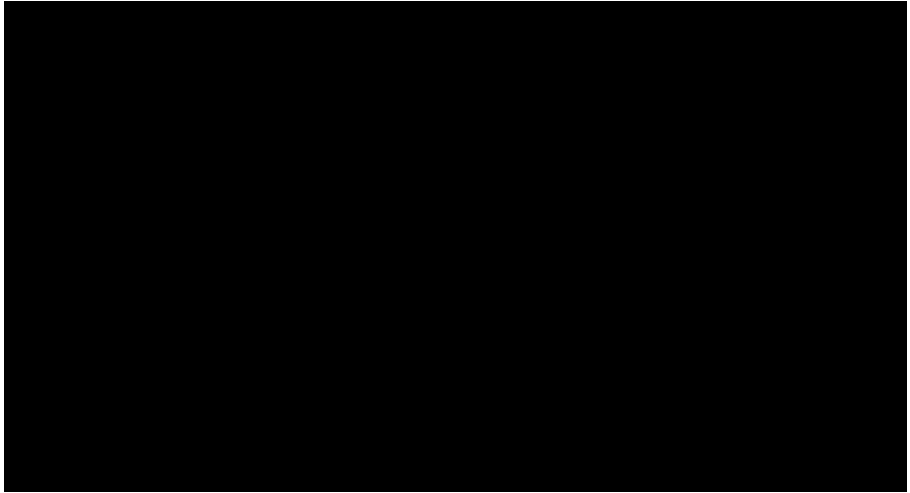


(絵一)

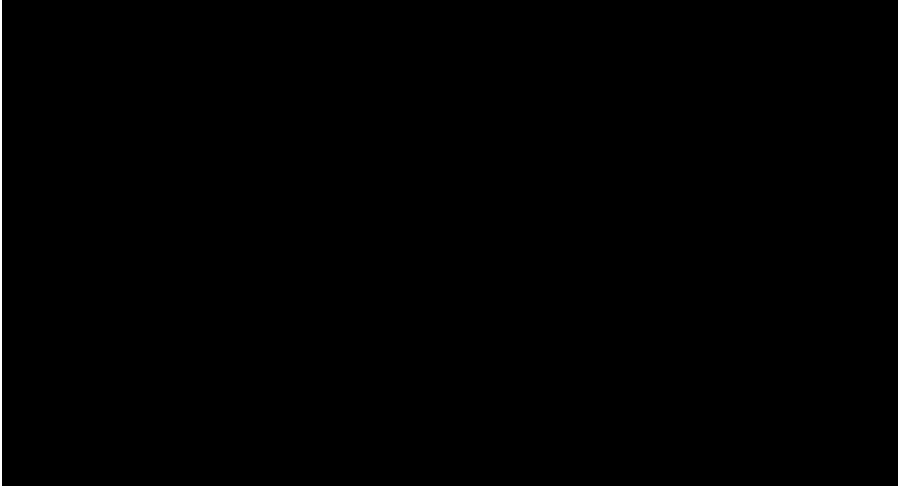


(第二段)

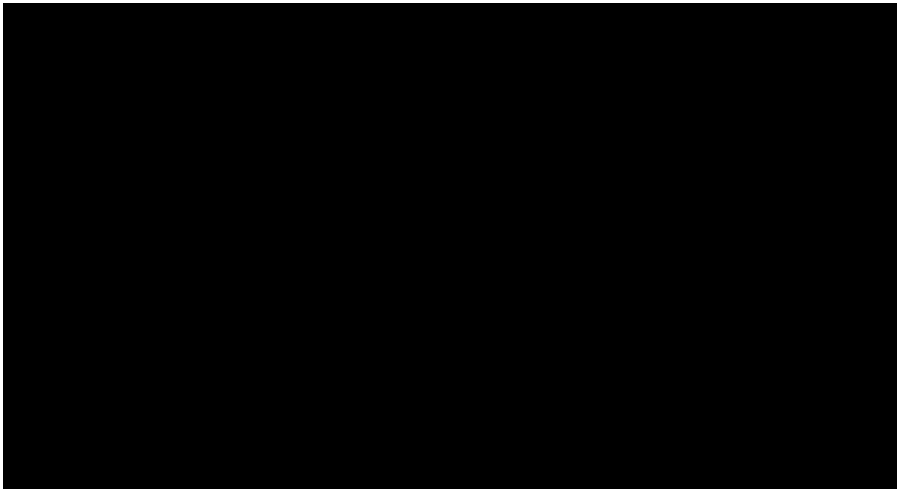




(絵二)



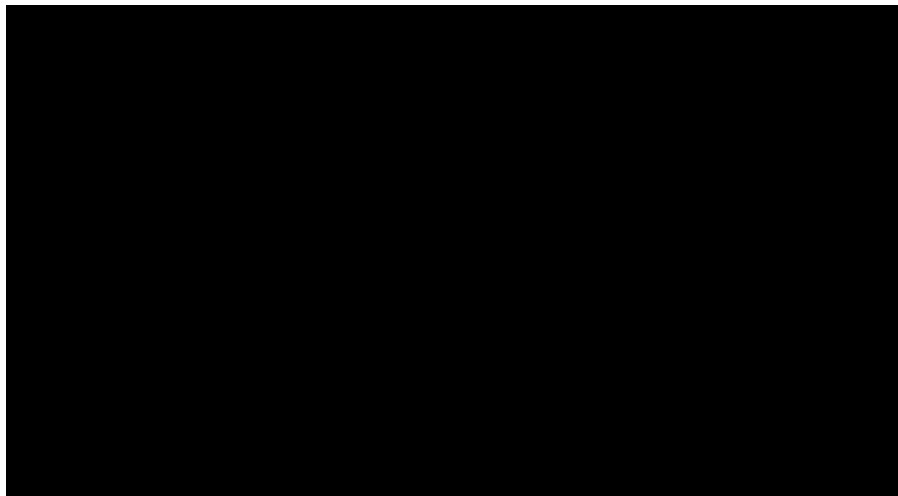
(第三段)



(絵三)

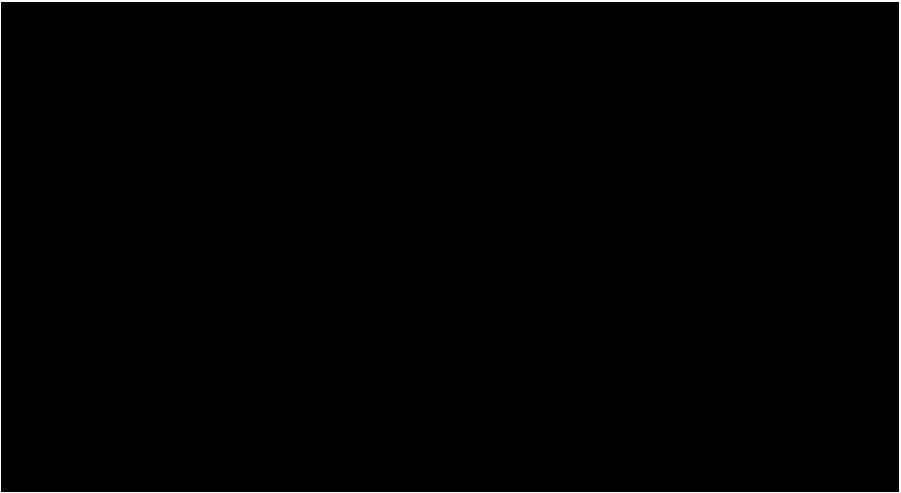
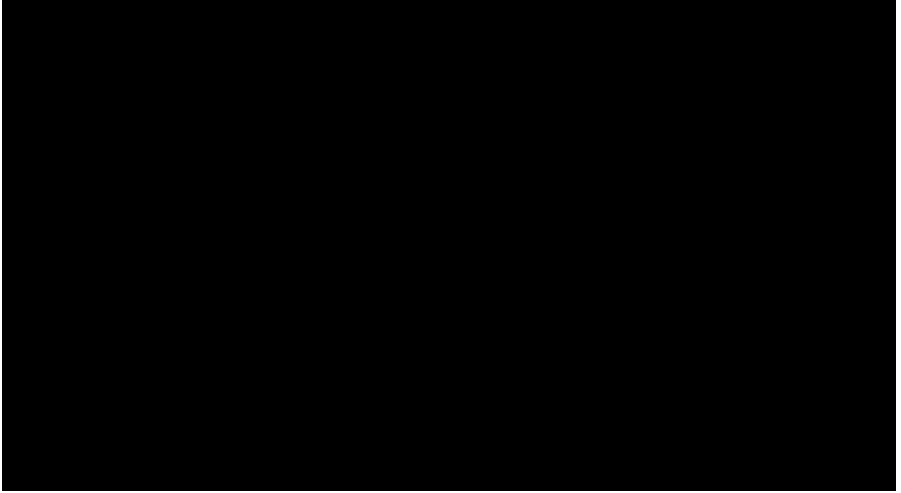


(第四段)

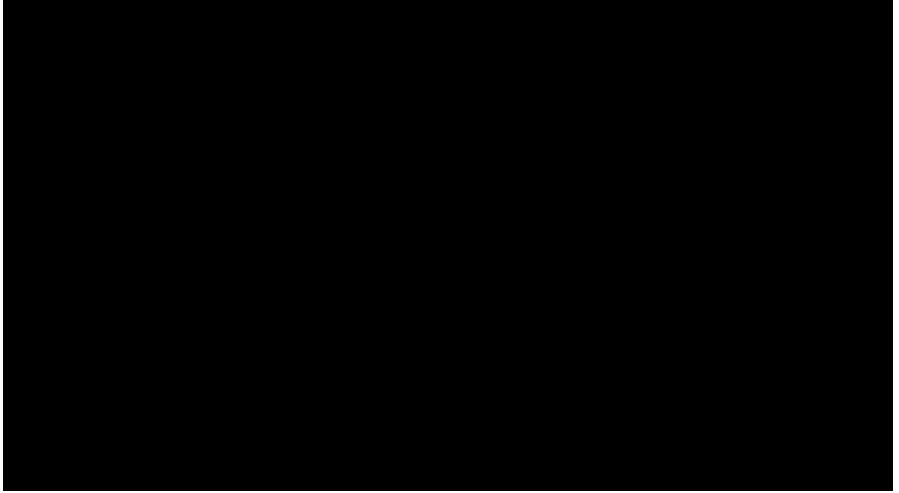


(繪四)

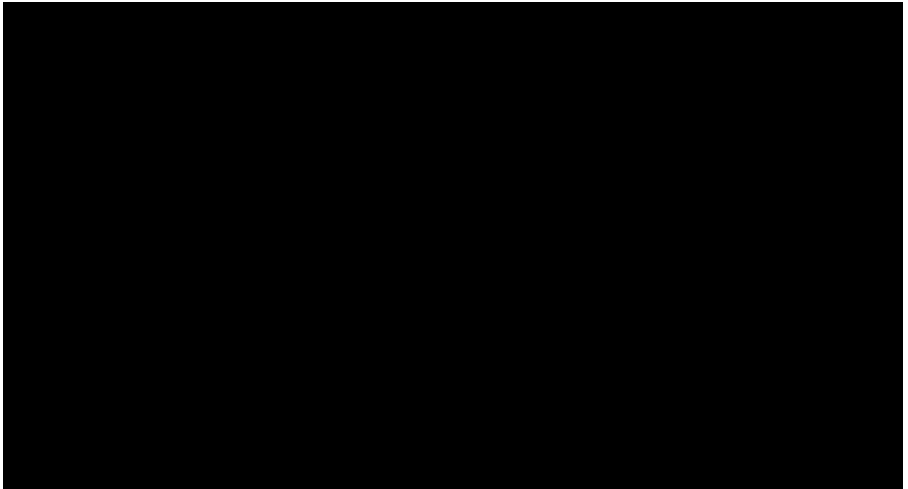




(第五段)



(絵五)

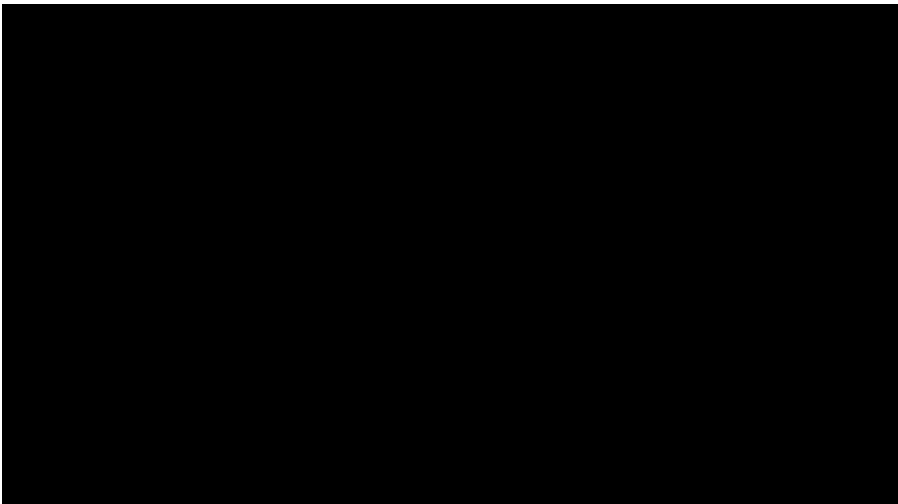


(絵六)

(第六段)



(第七段)



(絵七)

